

## 英 語（リスニング）

### 第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

#### 1 前 文

大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の「英語」にリスニングが導入されてから、15年目となる。令和2年度センター試験におけるリスニングテストの受験者は、本試験が512,007人（昨年度は531,245人）で、受験者全体の約97.2%（昨年度は約97.3%）に当たる。このことは、本テストの実施そのものや、問題の質や難易度、使用される言語材料等が、センター試験の受験者のみならず、全国の高等学校関係者及び英語教育関係者等、多方面に与える影響が非常に大きいことを意味している。

令和2年度センター試験「英語（リスニング）」の追・再試験について主に検討・評価した項目は、範囲・形式・難易度・分量・内容・表現についてである。また、評価の視点として、以下の六つの事項を主なよりどころとした。

(1) 高等学校学習指導要領「外国語」（以下「指導要領」という。）

(2) 令和2年度センター試験出題教科・科目の出題方法等

『英語』は、「コミュニケーション英語Ⅰ」に加えて「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「英語表現Ⅰ」を出題範囲とする。

(3) 「コミュニケーション英語Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅱ」「英語表現Ⅰ」の教科用図書

(4) 令和2年度大学入試センター試験「英語（リスニング）」（本試験）

(5) 平成31年度大学入試センター試験「英語（リスニング）」（追・再試験）

(6) 平成31年度大学入試センター試験 試験問題評価委員会報告書（追・再試験）

#### 2 範囲・形式・難易度・分量

(1) 範囲

指導要領及び教科用図書に基づいており、高等学校段階における「聞く」の領域を中心とした学習の成果を問うものとして、おおむね適切であった。

(2) 設問形式・設問数・配点・難易度

大 問	設問形式		設問数	配 点		難易度
第1問	対話（短）：イラスト、グラフ、数値等選択		6問	各2点	計12点	標準
第2問	対話（短）：応答選択		7問	各2点	計14点	やや難
第3問	A	対話（中）：内容把握	3問	各2点	計6点	標準
	B	対話（長）：内容把握	3問	各2点	計6点	やや難
第4問	A	モノローグ（長）：内容把握	3問	各2点	計6点	標準
	B	3人の会話（長）：内容把握	3問	各2点	計6点	標準
全 体			計25問		50点満点	標準

本試験に関しては、平均点が28.78点で、昨年度と比較すると、2.64点下降した。平均点は6割程度であり、標準的な問題だったと言えるが、このことは、本試験に類似した問題形式で作問されている追・再試験に関しても当てはまると思われる。

(3) 分量

① スクリプト

(( ) 内は本試験のもの)

大 問	設問ごとのスクリプト語数						平均語数	最大語数差
第1問	No. 1	29 (26)	No. 2	32 (30)	No. 3	28 (29)	29.3語 (28.3語)	7語 (4語)
	No. 4	31 (30)	No. 5	31 (28)	No. 6	25 (27)		
第2問	No. 7	25 (24)	No. 8	24 (31)	No. 9	20 (28)	25.0語 (26.7語)	7語 (7語)
	No. 10	25 (27)	No. 11	27 (25)	No. 12	27 (25)		
	No. 13	27 (27)						
第3問A	No. 14	47 (47)	No. 15	50 (50)	No. 16	49 (49)	48.7語 (48.7語)	3語 (3語)
第3問B	No. 17 - 19		150 (144)					
第4問A	No. 20 - 22		203 (198)					
第4問B	No. 23 - 25		269 (297)					

スクリプトの語数については、本試験同様、各設問の趣旨・目的に即したおおむね適切な分量であった。

② 質問文と選択肢

センター試験のリスニングでは、第2問を除き、質問文が問題用紙に印刷されている。そのため、選択肢の語数と合わせその分量はリスニングテストとしての妥当性を考える上で一つの視点になる。10語以上の質問文は例年並みの5問で、選択肢の語数もほぼ例年並みの分量であった。

③ 第3問Bの視覚情報

視覚情報に含まれる文字の語数は、今年度は48語（昨年度100語）と大幅に減少し、タイムテーブルという性質上、同じ語句が繰り返し使用され、情報処理量自体は少なかったが、教師が校外学習のスケジュールを立てるといふ、高校生にとってなじみの薄い場面で、さらに語彙レベルも高かったため、難易度としては例年並みであった。

3 内容・表現・程度

(1) 総括的分析

① スクリプト

例年同様、「写真を見ながら家族のことを話す」「ドアを開けるようお願いする」「会議の時間を決める」など、日常の様々な場面を想定した会話が盛り込まれており、「多様な場面における言語活動を経験」させることを促す指導要領の趣旨に沿ったものと言える。また、“Let’s go out for a bite.” “those go to the office over there.” など、平易な単語を用いてはいるが、受験者にとってはなじみの薄い表現が随所に見られ、実際の会話にかなり近いやり取りの場面となっていた。

第1問では、幅を持たせた数値の計算で最大値を問う問題や、円グラフの各項目に関して文字情報が与えられていない問題など、新傾向の問題が見られた。第3問Bでは、二人の教師が校外学習のスケジュールを立てている対話を聞き取る問題で、高校生にとって身近な場面設定とは言えず、さらに“Could yours?”などの短いやりとりが意味する内容を正確に判断する必要があるため、やや難易度が高かった。一方、第4問Aは、クレジットカードの使用を控えるなど、高校生にとっては身近な話題とは言えないものの、モノログであるため、場面・状況が想像しやすく順を追って聞いていけば十分に解答できる良問であった。全体的に、文脈を理

解する力や話者の意図を類推する力が試されたと言える。

② 質問文と選択肢（図表中の表現を含む。）

例年同様、複数の情報を結び付けて処理する力、場面・文脈を的確に把握した上で話の流れを類推する力、言い換えられた表現を限られた時間で正確に認識する力を問う設問が多かった。また、“Yes, two in fact.”などの省略された表現が使われていたり、“That works for me.”などの実際の会話を再現したauthenticな表現が見られた。

③ 音声

数値などを含む会話では、実際のコミュニケーションの場面でも確認のために聞き返すことがあることを考えると、現行の2回再生は自然である。会話の場面に応じて声の調子を変えるなど、情報が伝わりやすい工夫がなされていて、受験者にとっては場面が想像しやすい音声となっていた。全体的な速度は昨年度に比べゆっくりであったが、場面や会話の目的に照らし合わせるとおおむね適切であった。来年度から実施される大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）では、1回再生になる設問もあるが、今年度同様、受験者にとって過度な負担とならないよう配慮が求められる。

④ まとめ

文法・語彙・表現・発話速度などの観点から、受験者の日頃のコミュニケーション活動における学習成果を測るものとしておおむね適切であった。検定教科書に比べると場面設定が実際の会話に近く、日頃から使用場面を想定した言語活動をどれだけ行っているかが問われており、authenticで多様な表現に触れさせるとともに、4技能全てでそれらを使えるように指導していくことが求められている。また、実際のコミュニケーション同様、センター試験においても、聞き取ったり読み取った情報を整理して正確に判断する力が求められており、教育現場においても引き続き実践的な思考力や情報処理能力を養うことが必要である。

(2) 個別的分析

第1問 昨年度同様、イラストやグラフ、数字の聞き取りなどを含む問題である。問2では、“between 25 and 30 thousand”や“10 to 20 thousand”など幅のある数値を聞き取った上での計算が必要であった。また、“budget”の動詞としての用法は受験者にはなじみが薄く、難易度を上げたと思われる。問5では、“four dollars each”や“two for one dollar”など計算を複雑にする要素が含まれており、受験者に求められる情報処理量が多かった。

第2問 昨年度同様、A-B-A形式の短い対話を聞いて、発話の意図や状況を把握した上で、次の発言を予測する問題で、文脈に応じた類推する力が試された。問9の“Yes, two in fact.”や問13の“say…five then?”などは、会話独特のSVを含まない端的で自然な表現となることがかえって理解を困難にした。また、問10の“in a flash”や問13の“That works for me.”は実際の会話場面で使われる自然な表現ではあるが、受験者にとってはなじみが薄かったと思われる。

第3問 **A** 昨年度同様、日常的な話題について二人による6～7回程度のやりとりを聞く問題である。問14では、男性の“Lets check it out.”と“Maybe we can get an autograph.”のセリフから彼の意図を、問15では、男の子の“After this program is over.”のセリフから彼がテレビを見ていることを類推することが求められた。いずれの問題も使われている語彙レベルは高くはないが、話者の意図を類推した上で適切な選択肢を選ぶのは難しかったと思われる。

第3問 **B** 昨年度の2種類の表から1種類の表になり、処理すべき視覚情報は減少したが、場面設定は二人の教師が校外学習について話をするという、受験者にとってはなじみの薄いものであった。さらに、“pier”や“edible”など日常の授業において使われる頻度が低い単語が使

用されており、情報処理を難しくしたと思われる。問19では“cover the other workshop”を聞き取れないと正答にたどり着くことができず、難易度が高い問題であったと言える。

第4問 **A** 大学入学後のクレジットカードの使用に関するモノローグ（体験談）の聞き取りである。筆者の行動や考えを時系列に沿って追いやすく、語彙や表現も標準的で、取り組みやすい問題であった。“bank account”など受験者にとってはなじみが薄い語句もあったが、前後の文脈から容易に推測できるものであり、理解の妨げになるものではなかった。三つの設問はいずれもストーリーの重要な点を問うており、話のアウトラインを把握する力を適切に測っている良問であった。

第4問 **B** 抹茶風味の食べ物に関する3人の会話で、読み上げ速度は、本試験（137wpm程度）より遅い121wpm程度であった。問23は、“observe”の内容を聞き取る設問だが、会話の中で選択肢の表現がそのまま使われているため、聞き取りの難易度は比較的低かったと思われる。問24は、質問文の“concern”に戸惑った受験者がいた可能性はあるが、選択肢の中に紛らわしいものがなく、正答にたどり着くのは比較的容易であったと思われる。一方、問25は、“we can agree to disagree”を聞いた瞬間に意味が分かる受験者は少なかったと思われ、さらに、3人それぞれの意見が違うことを理解し、推論して共通する部分を探し出す思考力が求められる、やや難易度の高い問題であった。

#### 4 意見・要望・提案等

- (1) 今回の試験は、いずれの問題も適切な語数であったと考えられるが、来年度の共通テストでは、1回読みの問題が含まれるため、問題量の増加が予想される。試験時間を考慮した上で受験者にとって極端な負担増とならないように配慮していただきたい。
- (2) 第1問のグラフに関する設問では、グラフの中に数字が示されておらず、リスニング能力とは関係のない部分で受験者が困惑した可能性がある。グラフは、数値が入っていないなどの不自然なものにならないよう配慮していただきたい。第2問については、やりとりの中での自然な応答を選ぶ能力が問われるので、作為的な選択肢が正答とならないように引き続き配慮をお願いしたい。また、authenticな会話を身に付ける必要があるものの、未習の表現に対し、短時間で正確に推量し、解答を導くのは受験者にとってやや負担が大きいと思われる。推量することに加えて、複雑な情報処理を必要とするような問題にならないよう配慮していただきたい。第3問、第4問については、聞き取った情報を基に状況をイメージしたり、言い換えを駆使して内容を再構築したりすることを求める問いが多く、単に英語を聞き取るだけでなく、聞き取った情報を内在化して理解する必要があるため、複雑な内容や過剰な情報量とならないよう、文の構造・語彙・パラグラフ構成に配慮しつつ、質問が主要な内容に関するものとなるようにしていただきたい。
- (3) 今後とも、日常使われる自然な表現や、受験者が近い将来経験するであろうコミュニケーションの場面を取り入れていただきたい。なお、来年度の共通テストから導入予定の1回聞きの問題については、実際の会話場面においても1回しか聞けないような情報について聞き取る力を測る問題を検討していただきたい。その場合においても、会話中の言い換え表現や視覚情報が理解の助けになるよう配慮していただきたい。
- (4) 今年度の発話速度や明瞭さは受験者にとって取り組みやすいものであったと思われるが、実際の英語の運用場面での発話速度は、トピックの内容や状況、相手との関係性、話者の個人的な特性など、様々な要素によって変化するものであるため、大学入試においてもそれぞれの状況にふさわしい速度であることも必要だと考える。一方で、入試という性質上、リスニングテストにおける適切な発話速度をどこに設定するかは非常に難しい問題である。来年度、1回再生の問題が

含まれる中で、場面設定や処理すべき情報の量と種類、質問文と選択肢の難易度など、様々な要素を総合的に勘案して、受験者の聴解力と聞き取った情報の処理能力を適切に測れる出題となるよう配慮していただきたい。

## 第2 教育研究団体の意見・評価

### ○ 全国英語教育研究団体連合会

(代表者 鈴木 真人 会員数 約60,000人)

T E L 03-3267-8583

#### 1 前 文

今年で最後となる令和2年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）では、昨年の受験者数の531,245人から微減し、全国で512,007人の受験者がこの方式の試験に取り組んだ。高等学校学習指導要領（英語）では「実践的コミュニケーション能力の育成」に重点が置かれ、中等英語教育の現場では四技能と呼ばれる、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」「話すこと」を総合的に採り入れた授業形態が一般に進みつつある。また、現行の高等学校学習指導要領下では「英語で授業を進める」ことが明文化され、今までより一層「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」が重視される教育課程や授業が期待されている。この実践的な英語教育を推進する大きな流れの中で、センター試験へのリスニング・テスト導入が実現して、15年が経過した。想定される様々な困難を乗り越えて、この試験が実施されたことは、我が国の英語教育にとって画期的なことであり、日本人全体の英語力がこれによって向上することを期待させるほど有意義な試験である。

徐々に状況は改善されているものの、残念なことにリスニング・テストについては、毎年のように、ICプレーヤーの不具合などのトラブルが起きている。報道等によると、本試験において、ICプレーヤーの不具合などを訴えた91試験場の129人が、中断した設問から試験を再開する「再開テスト」の対象となった。また、試験中に受験者の目覚まし時計が鳴動するというトラブルがあり、「音の大きさが生活騒音の範囲を超えていた」として再開テストの実施を決めたケースもあったようである。後者のようなケースは、受験者の一層の自覚の強さが求められるが、機器関係のトラブルについては、今後一層改善の努力が必要である。というのも受験者に対して大学の可否、ひいては進路がこれによって左右されるという大切な試験である以上、受験者に大きな動揺を与えるからである。機械の故障は、余計な負荷を負わせ、当事者に不公平感を抱かせてしまう。ICプレーヤーに関するハード面での更なる改善をしていただき、トラブルの数がゼロになることを強く願っている。

本稿では、以下に今年度実施された追・再試験のリスニング・テスト問題に関する意見と評価を記すこととする。追・再試験のリスニング受験者数は174人であった（昨年度は497人）。追・再試験については、大学入試センターからの平均点発表等がないため、まずは本試験の分析を一部示す。

平均点は一昨年度が22.67点で昨年度は31.42点、本年度は28.78点（昨年度比▼2.64点）、100点換算では57.56点であった。平均点としては、4年前から難化傾向が続いていたが、昨年度は一転して平均点が上がリ、今年度は再び6割を切るというやや難化傾向となった。

読み上げられた英語の総語数は1,110語（昨年度は1,148語）で、設問と選択肢の総語数は567語（昨年は648語）で、読み上げられた英語の語数、設問と選択肢の総語数共にやや減った印象がある。ただし、語彙が少なくなったり、内容が稚拙になったりしているわけではなく、作問上必要である適正なものであるため、受験者には大きな変化には感じられなかったはずである。語彙をいたずらに難しくしたり、英文の内容を複雑にしたりしているわけではなく、現場で教える立場から

すると、普段からより実践的なトレーニングを積んでいる生徒は落ちついて実力を発揮できる問題が多かったと思われる。設問と選択肢の英文はあまり長くならないことが望ましいが、かといってそれに拘泥するあまり不自然な文章になることは避けるべきである。

今年度は、リスニング問題の平均点は6割には届かず、言わば骨太な内容であったと言える。これについては、我々が従前より求めていたことが反映されていたものであった。骨太な内容というのは、放送される英文がもう少しナチュラル・スピードを感じさせるものであったり、語彙についてももう少し幅広い内容のものであったりということである。というのも、試験問題等では高い聴解力を見せる生徒であっても、実際のコミュニケーションの場面においては、リスニングに苦勞をするという現状がある。リスニング問題は得点できるが、実際のコミュニケーション活動ではなかなか聴くことができない、というのはある意味で深刻な問題である。したがって、この分析においても、「多少難しくなっても、目指すべきレベルをある程度明示するものであってもよい」という提言を示してきた。

そういった意味では、今年度の難易度は今後の受験者が目指すレベルを明確に示せたということができる。また、難度が上がったからといって、いたずらに難しい要素が盛り込まれたということではない。会話の設定がやや親しみのあるものであったり、語彙もおおむね平易なものであったり、良質な内容であったと考えている。コミュニケーションに根差したやりとりを問うものが増え、より実践的な内容となっている。これは、今後の指導現場でより実践的なコミュニケーション活動の必要性を促し、またディスカッションやディベートなどの相互的で集団的な言語活動を促す一助となることも考えられ、歓迎すべき傾向である。

## 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問は短い会話を聞いて質問に合う答えを選択肢（イラストを用いたものが多い）から選ぶ問題である。会話は2往復（A-B-A-B）、内容も日常会話が多い。難易度から言えば、標準的な問題と言えよう。ただし、幾つかについては難易度が高いものがあった。これについては後述する。

各問の内容だが、大半が日常生活に根差した、身近な内容となっており、受験者にとってもイメージしやすい場面となっているものが少なくなかった。今年は「デザインしたTシャツの柄」について問うイラスト問題から始まり、問2で「旅行の予算の最高額について」を問う問題、問3に「男性の仕事について」についての問題、問4に「スワヒリ語での猫の名付け」について問う問題、問5には、「フルーツを買う個数」について問う問題、問6では「ある地域の穀物の生産」についてやりとりしている場面について、グラフを通して問う問題などが出題された。指導する立場としては、今後も今年度同様、最初の設問は「耳慣らし」として負荷のかからないイラストの問いなどを設定し、徐々に複雑な問いへと出題されることを希望したい。また、実際の生活場面で遭遇するコンテクストが中心であり、テーマも同時代性を意識したものが多く出題されたことは、作問者の創意工夫が感じられ、非常に良問であったと考える。

本試験よりはやや難度は高く、本試験でも平均点が下がり、ややハードルが高くなった印象があるが、追・再試験においても受験者にとっては非常に良問が多かったように思われる。例えば、問1の「Tシャツのデザインについてやりとりする場面」や、問2の「旅行代金についてやりとりする場面」などは日常生活でのやりとりとして十分遭遇する可能性のある身近なトピックである。ただし、幾つか聞いた内容を処理することを求められる問題もあった。問5は、複数の情報を把握していないと正解できない。「フルーツを買うために8ドル持っており、4ドルのパイナップルを一つ買い、残りのお金で二つで1ドルのオレンジを買う」、ということ聞き取る必要がある。質

問は「オレンジをいくつ買うのか？」というものなので、「 $(8 - 4) \div 2 \times 2$ 」という計算が必要になる。もちろん平易なものだが、焦っている受験者にはやや時間がかかったかもしれない。また、問6も平易な問題ではあるが、グラフのB、つまりriceの占有率の3分の1という情報をグラフを見ながら早く把握しないと戸惑うことになる。難易度も適正で、今年度も好ましい出題であった。

第2問は対話の最後の発言に対する応答文を選び、対話を完成させる問題。数年前から、全ての問いがA-B-Aで終わり次のBを答えるタイプに統一され、受験者が問題形式に慣れたこともあり、それほど難しいと感じなかったように思われる。ポイントが明瞭なだけに比較的易しい部類の問題となるが、基礎的な運用能力を試す重要な問題であり、今後もこの種類の問題数が出題されることを期待したい。問7では、「放課後に軽食に誘う場面」、問8では「タイピングについてやりとりする問題」、問9では「写真を通してやりとりする場面」、問10では「ドアを開けることを依頼している場面」、問11は「書類を提出する場所についてやりとりする場面」、問12では「失くした自転車のカギについてやりとりする場面」、問13については「会議を設定する場面」についての問題であった。いずれも実生活を意識した内容であり、口語表現を含む自然な会話であった。ただし、いくつかの問題には、かなりイディオマティックな表現があり、結果的に「知識」を問う問題になっていると思われるものもあった。

例えば問7であるが、Let's go out for a biteという部分である。go (out) for a biteというのは「軽く食事に行く」という一般的なものであるが、受験者の多くが高校生であり、学校環境も異なる中での出題であるので、イメージするのが難しい場面設定であった。また表現としてもややイディオマティックな表現で、「表現の知識」を求められている部分がある。「本試験」の2でも述べたが、せっかく会話の内容が理解できても、解答の部分で「知識」を問われるような性質の問題が増えてしまうと、「知識」を吸収するの必要性を感じさせてしまい、受験者に偏った学習へと導くことにもつながりかねない。コンテキストは聞き取れても知識としてたくさんの表現を覚えないと対応できないような問題は、極力避けられることが望ましい。

第3問については、Aは対話を聞いてその内容（場面・状況など）を推測して質問に答える問題が3題であった。Aについては、対話の行われている場面や状況の推測、対話をしている人物の発言の意図や人物の今後の行動を予測するなど、実際のコミュニケーションをしていく上で必要な状況判断力や推測する力を測ることにある。各問題は、全ての内容を十分に把握した上で、最後の台詞を聞き逃すことができない問題であった。問14は「空港で野球選手にサインをもらう場面」について問う問題、問15は、「犬を散歩に連れていくやりとり」についての問題、問16は「イタリアンレストランに行こうとしている場面」について問う問題であった。いきいきとした英語のやりとりが問題となることはとても良い傾向と言える。受験者も英語を学ぶ喜びを増すことにつながるであろう。

Bは、長い対話を聞き、イラストに付された文字情報を基に三つの設問に答える形式である。本試験では、「アルバイトに何をするかについてやりとりする」という設定であった。追・再試験では「校外学習で2人の教員が生徒をどの講座に連れていくかについてやり取りする場面」であった。本試験の講評にも述べたが、文字情報と音声情報をしっかりと組み合わせる考えなければ解けない良問であり、受験者にとっては厳しい部分もあるかもしれないが、より高い聴解力の養成を目指してもらうためにも、この傾向は好ましいものと言える。追・再試験の本問も、文字と音声からの情報をしっかりと把握しなければ正解できない良質の問題である。例えば問18では、“I want my class to do data collection and a workshop in the morning”を聞き取ることで活動の順序を選択することができる。このように、読まれた英文、イラスト及び文字情報からしっかりと情報を聞



き取り整理しないと答えられない。ある意味では、受験者にとってかなりハードルの高い問題である。しかしノート・テーキングが必須になると思われる情報量であるので、単に英文を聴くのではなく、要点を書き留めたりすることが効果的であることに気づくはずで、このように同時に様々な角度から情報を収集し、統合させる問題は、実践的なコミュニケーション力を養成する立場からも大変に良いと言える。

第4問は、長めの文章を聞いて三つの設問に答える形式の問題である。本試験ではエッセイ風の英文が使用され、放送された英文がそのまま解答になるのではなく、言い換えや類推を必要とする問題で、方向性としては好ましいものであり、テーマも「お茶と時間に見る日本とネパールの文化の違い」であった。追・再試験についても、「クレジットカードの適正な使用」といった今日的なテーマが扱われており、適正である。ただし、「クレジットカードをビニールに入れて、水で凍らせて、使うときには解凍する時間を要するので冷静になる」というのは大変愉快で斬新であるが、たとえ聞き取ることができたとしても、受験者にとってはやや突飛でイメージしにくかったかもしれない。内容をアトラクティブにしようとする御努力には敬意を表すが、あまりトリッキーになってしまうことは望ましくない。ただし、問20から問22についての設問については素直な内容であり、良質な出題であったと思われる。

Bは、昨年度は「スキー旅行に向けての体力的な準備」について意見交換をするものであった。今年度は「海外でも注目されている日本の食べ物について」意見交換する場面であり、実際の英語の授業でも扱われることがイメージされる話題であり、良質なものであった。3人で議論しながら意見をやりとりしていくという流れも、日々ディベート等を現場で活用している立場からすると、良質の問題である。また、設問もそれぞれの立場を明らかにする問題や、議論の流れを推論させる問題であり、とても良い方向性の問題であった。難解な語彙等は使われておらず、議論の流れを明確に把握させる対話内容であった。本質的な聴解力を問う問題であると言える。

### 3 ま と め

センター試験においてリスニング・テストが導入され、実施されていることは極めて有意義なことであり、英語の授業では、今後も「実践的コミュニケーション能力の育成」に力が注がれることであろう。実際の教育現場でも、リスニングに関する諸活動が少しずつ活性化されているのも、センター試験でのリスニング問題の存在は大きい。歴史的にもこのような方式でリスニング問題を課すセンター試験の果たした影響は計り知れないものである。

年々問題が良化されており、コミュニケーションをベースとした問題作りや、出題レベルの健全な設定など、例年この場で要望としてお示ししている部分についても真摯に取り組んでいただけているという印象があり、作問者の方々の御苦勞に心から敬意を表したい。多面的な出題形式は、今まさに求められている「幅広い聴解力」を問うもので、前向きな傾向変化である。一部には難化したとの声もあるが、前提として、必要な聴解力を問うているものであるもので、あまり過度に反応する必要はないと考える。このセンター試験のリスニングが、グローバル化されつつある世界で必要とされる躍動的な言語運用力を受験者が養成するモチベーションとなり、また、教育現場で積極的な言語活動を促すような特性をもつものであることが望ましい。来年度から実施される大学入学共通テストでは、「英語（リーディング）」と配点が同一となり、「英語（リスニング）」はこれまでとは異なった存在となる。今後の一層の内容の充実を期待している。

## 第3 問題作成部会の見解

### 1 問題作成の方針

大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の外国語「英語（リスニング）」は、高等学校の基礎的学習の達成度を判定することを基本方針として、高等学校学習指導要領（以下「指導要領」という。）に準拠し、コミュニケーションを重視する英語教育の成果を問うものとなっている。具体的には、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る」という外国語教育の目的に基づくものである。出題に当たっては、指導要領の中の、「情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」という点に配慮した。

第1問～第4問までの問題内容は、次のとおりである。

#### (1) 第1問

比較的平易な英語（語数約30）を聞いて、必要な情報を正しく把握することができるか否かを見る（イラストやグラフを使用する問い、計算を伴う問いも含む）。

#### (2) 第2問

比較的平易な対話（語数約30）を聞いて、場面、目的、言語の機能などを理解し必要な情報を得て、相手の最後の発話に対する適切な受け答えを判断する力を測る。

#### (3) 第3問

##### ① 第3問A

対話（語数約50）を聞いて、情報、場面、話し手の意向などを的確に把握できるか否かの判断力を測る。

##### ② 第3問B

対話（語数約150）を聞いて、視覚的情報（ちらし、ポスター、一覧表など）も交えながら、発話者達のような見解や発話の意図を理解できるかどうかを見る。

#### (4) 第4問

##### ① 第4問A

まとまりのあるモノログ（語数約200）を聞いて、要点や概要を把握して考え判断できるか否かを測る。

##### ② 第4問B

あるテーマについて三人が議論している会話を聞き、様々な見方や考え方の共通点や相違点を把握し、最終的な話し合いの主旨を判断できる思考力を試している。

### 2 各問題の出題意図と解答結果

追・再試験の問題作成方針、問題形式は本試験と同じであるが、難易度に関しては、受験者が本試験の出題形式と内容を知り得る状況にあることを考慮し、追・再試験の難易度が本試験よりも低くならないように配慮した。構成する四つの大問の出題意図及び解答結果は、次のとおりである。

#### (1) 第1問

この大問の出題意図は、比較的平易な英語を聞いて、内容を理解できるか否かを見るものである。問5は、聞き取った内容を基に計算を要する問題であるが、短時間で適切な選択肢を選ぶことがやや難しかったようである。全体的には、識別力のある良問が多かったと言える。

#### (2) 第2問

この大問の出題意図は、日常的なシーンで展開される対話に関して、適切に応答することができるか否かを見ることにある。対話は全てA・B二者間のA－B－Aの短い形式を取っている。それぞれの発話は必ずしも長いとは言えず、また話される英語そのものも比較的平易である。正答を導くには、状況や二人の関係性を正確に把握すること、自然な会話で用いられる英語らしい表現を適切に理解することが求められるが、問13（打ち合わせの時間を決める会話）については選択肢の識別で苦勞した受験者が多かったようである。

(3) 第3問

① 第3問A

第3問Aの出題意図は、短めの対話を聞いて、その場面や話者の意図を理解できるかどうかを問うものである。状況設定は、問14（空港の到着ゲートでの会話）、問15（誰が犬の散歩をするか決める会話）、問16（どこで外食するか決める会話）であった。いずれも、成績上位層をしっかりと識別できる問題であったと考えている。

② 第3問B

第3問Bの出題意図は、視覚情報を見ながら比較的長い対話を聞き、その場面や話者の意図を理解する能力を問うものである。「校外学習のクラス別スケジュールに関する教師同士の話し合い」という状況設定であった。視覚情報として、実施可能な活動とその時間帯に関する表が示されていたが、表にのみ記載された情報と会話においてのみ提示される情報を正確に把握しないと正解にたどり着けない問題であった。問19は比較的難易度が高い問題であったと考えられる。成績上位層の識別はしっかりとされており、総じて良問であったと考えている。

(4) 第4問

① 第4問A

第4問Aの出題意図は、「クレジットカード依存への対応」を題材とした少し長めのモノローグを聞いて、要点や概要をつかむことができるか否かを見ることである。このモノローグは、「問題→解決」というシンプルな情報構造で展開されており、設問もモノローグの展開に沿った比較的平易なものであった。社会的に取り上げられることが多々あるテーマであったため、いずれの設問も比較的正確しやすかったと考えられる。

② 第4問B

今回も「討論形式の問題」を出題した。登場人物3名が人気の抹茶味について意見を交わすとともに、今後人気が出るフレーバーは何かについて議論している場面である。解答に当たっては、各登場人物の意見を正確に把握することが求められた。問25はやや難しかったかもしれないが、成績上位層をしっかりと識別できる問題であったと考えている。

### 3 出題に対する反響・意見等についての見解

「英語（リスニング）」の試験に対して高等学校教科担当教員から意見・評価を頂いた。好意的な受け止め方をさせていただいたことに感謝を申し上げたい。以下では、高等学校教科担当教員から頂いた評価、意見・要望・提案等の要点を紹介し、当部会の見解を述べておきたい。

#### 高等学校教科担当教員の評価、意見・要望・提案等

(1) 評価の総括

① スクリプト

例年同様、「写真を見ながら家族のことを話す」「ドアを開けるようお願いする」「会議の時間を決める」など、日常の様々な場面を想定した会話が盛り込まれており、「多様な場面における言語活動を経験」させることを促す指導要領の趣旨に沿ったものだと言える。また、“Let’s

go out for a bite.” “those go to the office over there.” など、平易な単語を用いてはいるが、受験者にとってはなじみの薄い表現が随所に見られ、実際の会話にかなり近いやりとりの場面となっていた。

第1問では、幅を持たせた数値の計算で最大値を問う問題や、円グラフの各項目に関して文字情報が与えられていない問題など、新傾向の問題が見られた。第3問Bでは、二人の教師が校外学習のスケジュールを立てている対話を聞き取る問題で、高校生にとって身近な場面設定とは言えず、さらに“Could yours?”などの短いやりとりが意味する内容を正確に判断する必要があるため、やや難易度が高かった。一方、第4問Aは、クレジットカードの使用を控えるなど、高校生にとっては身近な話題とは言えないものの、モノログであるため、場面・状況が想像しやすく順を追って聞いていけば十分に解答できる良問であった。全体的に、文脈を理解する力や話者の意図を類推する力が試されたと言える。

② 質問文と選択肢（図表中の表現を含む。）

例年同様、複数の情報を結び付けて処理する力、場面・文脈を的確に把握した上で話の流れを類推する力、言い換えられた表現を限られた時間で正確に認識する力を問う設問が多かった。また、“Yes, two in fact.”などの省略された表現が使われていたり、“That works for me.”などの実際の会話を再現したauthenticな表現が見られた。

③ 音声

数値などを含む会話では、実際のコミュニケーションの場面でも確認のために聞き返すことがあることを考えると、現行の2回再生は自然である。会話の場面に応じて声の調子を変えるなど、情報が伝わりやすい工夫がなされていて、受験者にとっては場面が想像しやすい音声となっていた。全体的な速度は昨年度に比べゆっくりであったが、場面や会話の目的に照らし合わせるとおおむね適切であった。来年度から実施される大学入学共通テストでは、1回再生になる設問もあるが、今年度同様、受験者にとって過度な負担とならないよう配慮が求められる。

④ まとめ

文法・語彙・表現・発話速度などの観点から、受験者の日頃のコミュニケーション活動における学習成果を測るものとしておおむね適切であった。検定教科書に比べると場面設定が実際の会話に近く、日頃から使用場面を想定した言語活動をどれだけ行っているかが問われており、authenticで多様な表現に触れさせるとともに、4技能すべてでそれらを使えるように指導していくことが求められている。また、実際のコミュニケーション同様、センター試験においても、聞き取ったり読み取った情報を整理して正確に判断する力が求められており、教育現場においても引き続き実践的な思考力や情報処理能力を養うことが必要である。

(2) 意見・要望・提案等

① 今回の試験は、いずれの問題も適切な語数であったと考えられるが、来年度の大学入学共通テストでは、1回読みの問題が含まれるため、問題量の増加が予想される。試験時間を考慮した上で受験者にとって極端な負担増とならないように配慮していただきたい。

② 第1問のグラフに関する設問では、グラフの中に数字が示されておらず、リスニング能力とは関係のない部分で受験者が困惑した可能性がある。グラフは、数値が入っていないなどの不自然なものにならないよう配慮していただきたい。第2問については、やりとりの中での自然な応答を選ぶ能力が問われるので、作為的な選択肢が正答とならないように引き続き配慮をお願いしたい。また、authenticな会話を身に付ける必要があるものの、未習の表現に対し、短時間で正確に推量し、解答を導くのは受験者にとってやや負担が大きいと思われる。推量することに加えて、複雑な情報処理を必要とするような問題にならないよう配慮していただきたい。

い。第3問、第4問については、聞き取った情報を基に状況をイメージしたり、言い換えを駆使して内容を再構築したりすることを求める問いが多く、単に英語を聞き取るだけでなく、聞き取った情報を内在化して理解する必要があるため、複雑な内容や過剰な情報量とならないよう、文の構造・語彙・パラグラフ構成に配慮しつつ、質問が主要な内容に関するものとなるようにしていただきたい。

- ③ 今後とも、日常使われる自然な表現や、受験者が近い将来経験するであろうコミュニケーションの場面を取り入れていただきたい。なお、来年度から導入予定の1回聞きの問題については、実際の会話場面においても1回しか聞けないような情報について聞き取る力を測る問題を検討していただきたい。その場合においても、会話中の言い換え表現や視覚情報が理解の助けになるよう配慮していただきたい。
- ④ 今年度の発話速度や明瞭さは受験者にとって取り組みやすいものであったと思われるが、実際の英語の運用場面での発話速度は、トピックの内容や状況、相手との関係性、話者の個人的な特性など、様々な要素によって変化するものであるため、大学入試においてもそれぞれの状況にふさわしい速度であることも必要だと考える。一方で、入試という性質上、リスニングテストにおける適切な発話速度をどこに設定するかは非常に難しい問題である。来年度、1回再生の問題が含まれる中で、場面設定や処理すべき情報の量と種類、質問文と選択肢の難易度など、様々な要素を総合的に勘案して、受験者の聴解力と聞き取った情報の処理能力を適切に測れる出題となるよう配慮していただきたい。

以上が高等学校教科担当教員から頂いた評価、意見・要望・提案等の要点であるが、センター試験に関する御意見等は、いずれも追・再試験の性格と出題方針を踏まえた妥当かつ適切なものであったと考えている。

#### 4 ま と め

これまでどおり、英語リスニング力を適切に測ることに加え、会話内容に関する情報処理能力、思考力を問うことを重視した設問を心掛けた。総じて、識別力のある問題が出題できていたと考えている。